令和６年度　東原庠舎西渓校　校内研究計画

１　学校教育目標

「ふるさとに学び、志をもち、共に高め合う西渓っ子」の育成

２　研究主題

学ぶ喜びを感じ、自ら考え、学びをつないでいく児童生徒の育成（１年次）
～　９年間の学びを貫く学習スタイルの確立　～

３　主題設定の理由

今日、社会はかつてない大きな変革として Society5.0 の時代を迎えようとしている。ビッグデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティスク等の先端技術が高度化して、特に人工知能(AI)の発達により、我々の生活は劇的に便利で快適なものになっていくと言われている。

しかし一方で、「進化した AI が人間の仕事の大部分を奪ってしまうのではないか」「学校で教わったことがすべて通用しなくなってしまうのではないか」など、AI との共存を不安視する声も聞かれる。

このような時代の変革を迎えるに当たり、新学習指導要領も施行され、学校教育では子どもたちの「生きる力」をバランス良く育んでいくことがますます重要とされている。「幼稚園、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成 28 年 12 月中央教育審議会答申）では、国内外の学力調査の結果によれば子供たちの学力は近年改善傾向にある。一方で、学ぶことと自分の人生や社会のつながりを実感しながら自らの能力を引き出し、学習したことを活用して生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力には課題があるという指摘がある。予測困難な時代の中、義務教育の９年間で様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断し、課題を解決していくための力を育んでいくことは重要なことである。

本校の児童生徒の実態として、県学習状況調査や全国学力状況調査において、どの教科でも知識・理解、思考力・判断力・表現力ともに対県比や全国比で 1.00 に満たないという状況が続いている。特に思考力・判断力・表現力は県や全国と比べ顕著に低い。また本校は完全単学級で９年間、クラス替えがなく、人間関係の固定化がみられ、授業においても「〇〇さんが言っているから」というように自分の意見に自信がなく、根拠をもって話し合うことができない児童生徒が多い。また、全国学力状況調査の意識調査においても、夢や目標についての項目、家庭学習についての項目、ICT 機器が学習の役に立っているという項目、学習した内容を見直し、次の学習につなげるという項目、授業で学んだことを、ほかの学習に生かすという項目などで県や全国に対して否定的に捉えている児童生徒が多い。このような実態から、授業の中で自分の考えをもつ場、そして根拠をもとに伝え合う場の設定が必要だと考える。そして、それらの必要性、児童にとっての学習の目的をもたせるための、めあての設定や提示が必要である。また、どの教科、どの学年においても児童生徒が安心して取り組むことができる授業スタイルの確立は、主体的な学びにつながり、主体的に学ぶことが対話的な学びにもつながり、深い学びが実現されると考える。

本校では、義務教育学校としての特性を生かし、９年間の学びを貫く授業づくりについての協議

や実践を行う。新たな社会を生き抜くために、学ぶ喜びを感じ、自ら考え、学びをつないでいくことができる児童生徒の育成を目指し、その実現のための授業実践を考えたい。

4　研究の目標と計画

【目標】

各学年・各教科を貫く学習スタイルを基に、自分の考えを協働的な学習の場で表現することで、次への学びの意欲を高め、学びを次のステージへつないでいこうとする児童生徒を育成する。

【計画：３か年】

令和６年度（１年次）：９年間の学びを貫く学習スタイルの確立【重点目標：1 単位時間の大枠づくり】

令和７年度（２年次）：自分の考えをもたせる授業づくり【重点目標：考えをもたせる場の工夫】

令和８年度（３年次）：各教科、各学年の学びの接続と協働学習の工夫

【重点目標：めあての達成につながる協働的な学びの場の工夫】

5　研究の仮説

(1) どの学年どの教科にもつながる基礎的汎用的な学習スタイルを確立することで、児童生徒が安心して学ぶことができ、主体的対話的で深い学びにつながり、学力が向上するだろう。

(2) 授業で根拠をもとに自分の考えをもつ場を設定することで、児童生徒の主体性が育まれ、各教科で求められる資質能力が身についていくだろう。

(3) めあての達成につながる協働的な学びの場を工夫することで、相手意識や自己の学びの認知につながり、児童生徒が学ぶ喜びを感じるようになるだろう。

6　研究の内容及び方法

【内容】

(1) 学びの土台となる学習スタイルの策定

・話型、聴型

・授業の受け方、流れ

・協働学習について

・家庭学習との接続

(2) 根拠をもとに自分の考えをもつ場を設定した授業づくり

・考えをもたせる方法は様々（記述だけではない）

・各教科の特性に応じた根拠

・自分の考えをどのような方法で表現させるか（ICT 利活用も）

(3) めあての達成につながる協働的な学びの場の工夫

・めあてが児童生徒に学びを促すものになっているか

・必然性のある協働的な学び

・何のために話し合うのか（明確化）

・あくしゅタイムの充実（ICT 利活用も）

【方法】

(1) 全国及び佐賀県の学力・学習状況調査の結果を分析し、児童生徒の実態を把握する。

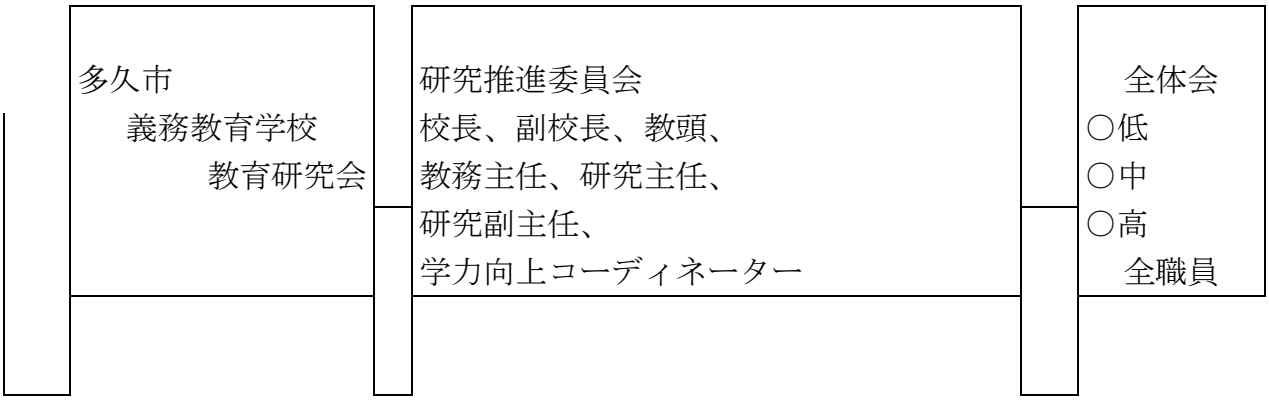
(2) 全ての教科に共通した「児童生徒につけたい力」について、各ブロックにおいて検討し、共通理解を図る。

(3) 自分の考えをもつ場や協働的な学びの場を取り入れた授業づくりについて、授業を相互に参加したり、各ブロックによる授業研究会を行ったりしながら、９年間を学びのスタイルを探る。

(4) 協働的な学びの場におけるＩＣＴの効果的な活用方法を探る。

(5) 予習復習を含めた、家庭学習と授業との接続、家庭学習の授業への有効活用を模索する。

7　研究組織及び構成



【全体会】

	授業づくり部	ICT利活用部	家庭学習部
低学年			
中学年			
高学年			

※各部の部長（◎）を１名決める

※校長・副校長は、全体への指導助言

８　今年度の研究計画

月日	曜	事項	内容
４月３日	水	第１回研究推進委員会	今年度の研究内容の提案内容　年間計画　等
４月８日	月	第１回全体研究会	研究テーマ、内容、組織の提案　年間の見通し
５月		第２回研究推進委員会	実践方針についての確認
５月８日	水	第２回全体研究会	実践方針決定（参観や振り返り）と学力向上評価対策シート
７月		第３回研究推進委員会	１学期の振り返りについて
７月１０日	水	第３回全体研究会	１学期の振り返り
８月		第４回研究推進委員会	２学期以降の見通しについて
８月　　日		第４回全体研究会	学習状況調査の分析（講師招聘）
１０月		第５回研究推進委員会	
１０月９日	水	第５回全体研究会	実践交流会
１２月		第６回研究推進委員会	２学期の振り返りと今後の見通しについて
１２月１１日	水	第６回全体研究会	２学期の振り返り
２月		第７回研究推進委員会	まとめと来年度の方針について
２月５日	水	第７回全体研究会	年間のまとめ　成果と課題の共通理解 次年度に向けて
３月		第８回研究推進委員会	次年度に向けて